



## C O N T E N T S

職責 副代表幹事・弁護士 高橋正人 .....	02	13年間の刑事裁判を終えて思うこと 幹事 本村 洋 .....	04
会員の声 宇治川勝義 .....	02	活動報告 .....	04~06
あすの会のこれから 代表幹事 林 良平 .....	03	関東・関西・九州地区集会,幹事会報告 .....	06~07

## 死刑制度について

幹事 松尾 明久

平成24年3月29日午前10時46分、駅のホームに居た私の携帯に、A新聞の記者より「今朝、上部死刑囚を含む3人の死刑が執行されましたが、ご存知ですか」と連絡があった。私はエッ!と思ったが、記者に「間違いではないですね」と聞き直した。その後も報道関係から続々と知らせがあり、執行されたことが事実と判明した。

事件から12年6カ月、死刑が確定してから3年7カ月、奇しくも150回目の月命日に執行されたことに事件の因縁を感じる。

死刑が確定してから今日まで、いつかは執行されると信じていたが、それでも憎むべき犯人がたとえ獄中であれ同じ空気を吸って生きていることを不快に思い、遺族感情と言われようと、私たちの税金で生かされていることに違和感を覚え承服できないでいたことが正直な気持ちである。

今回の執行で犯した罪に対し正当な罰が下されたことで、裁判で死刑が確定した時の区切りとは異なり、事件に対する大きな区切りとなった。事件のことは生涯忘れることはできないし、彼の犯した罪を赦すことはできないが、命で罪が贖われたことで、心の中で区切りをつけ、気持ちを整理したい。

今回、1年8カ月振りに死刑が執行されたが、早速、新聞紙上に死刑廃止や執行停止論者、日弁連、その他、執行に対する抗議や非難が出た。これまでも死刑執行の度、あるいは死刑判決が下されると、様々な意見が述べられ議論されるが、その大半が死刑廃止論者の意見である。しかも反対の理由がいつも同じように、死刑は残酷である、死刑廃止は世界の潮流だ、また中には死刑は野蛮な行為だと、何かのひとつ覚えのように唱え訴えている。だが、死刑囚でもある加害者が、どれほど残酷な行為で

無残な殺し方をしたか、その犯行には全く触れないで死刑を議論するべきではない。廃止を論じる人たちが、私と同じように最愛の家族を残酷な犯行で殺されたら、それでも同じように死刑廃止と訴えられるのか問いたい。犯した罪に値する罰が下されるのは当然であり正義である。

国際人権団体は、冤罪の可能性がある限り執行を進めるのは問題だとの意見を述べている。もちろん冤罪の可能性を疑われる死刑囚がいるとしたら、慎重に審理すべきは言うまでもない。また、死刑は国が人権を重んじていないとも言っているが、死刑囚(加害者)が自分勝手な理由で人を殺め、生存権を奪い、人権を踏み躪っておいて、今さら加害者の人権をとやかく言うのは筋違いであろう。

一部には死刑の存在が凶悪事件を引き起こす一因になっている・・・という意見もあるようだが、私は間違っていると思う。凶悪犯罪には極刑をもって臨むことが正しい在り方と信じる。

「死刑制度は存続すべき」である。

2009年の世論調査で、死刑容認85.6% 死刑廃止5.7%と、国民の大多数が死刑制度を支持している。死刑廃止は世界の潮流と言うが、廃止しているEU(27カ国)でも、今、凶悪犯罪が起きる度に死刑復活の議論が起きている。大手調査会社アンガス・リードの世論調査では、復活を支持する人が50%、反対が40%と出ている。

死刑について、廃止や存置の議論をし、意見を述べるのは自由であり結構だが、殺された被害者にも人権があり、生きる権利がある。それを理不尽に奪われたことを忘れてはいないか、しっかり考えてほしい。

現在の死刑制度を維持して、その法に携わる人は職務として、しっかり職責を果たしていただきたい。